

多様なジャガイモ の世界への伝播

アンデス高地原産のジャガイモが世界中に広がり、3億tもの生産量に達したのは、栽培しやすく、素晴らしい食べ物であったから。

アンデスのジャガイモ 昔、アンデスで1万品種以上も栽培されていたのはソラナムフレハなどの小さな、美味しいが、あまり穫れないイモであった。千数百年前、突然染色体が倍加して大きくなったジャガイモ、ソラナムアンディジェナが出現、美味しくはないが生産量の多いこのジャガイモが南米各地に広がったが、美味しいイモを食べたいアンデスの人々は古い小さなイモ、フレハを自給用に栽培し続けていた。

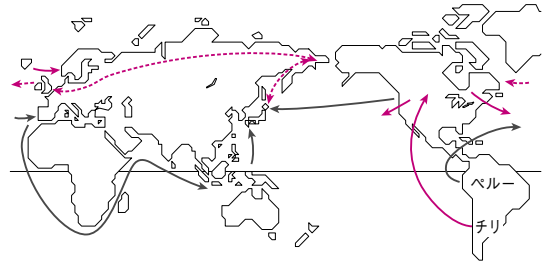
スペイン人が持ち帰ったイモ ピサロらが持ち帰ったイモは大きなアンディジェナ、征服者のスペイン人も美味しい小さなイモより、不味くても大きなイモに魅力があった。食料不足の貧しい時代だったから。

この不味さがジャガイモの普及のネックになった。貧乏人のパン、と呼ばれ、豊かな人たちはジャガイモを食べなかった。より豊かになり、肉や酪農製品、油と一緒に食べられるようになるとその美味しさに気づく。「ジャガイモは貧しい人には不味く、豊かな人には美味しい食べ物」だったのである。

航海食、越冬食として世界に広がった スペイン、ポルトガルの航海者はジャガイモを食べ続けると野菜不足による壊血病（ビタミンC欠乏症）にならないことを知る。大量のジャガイモを積んで船出し、世界の港でジャガイモを栽培させた。日本へはジャカルタから長崎へオランダ人が運んできた。ジャガイモの名の由来である。江戸末期、ペリー提督が函館開港を迫ったのは当時北海道沖に来ていた捕鯨船乗組員へのジャガイモと水の供給が目的だったと言われている。松前藩が亀田で栽培、納めた記録がある。

一方、スペインからドイツ、ロシアへは越冬食として広がった。冬の野菜不足対策である。ジャガイモを携えたエカテリーナの征服者たちはウラル、シベリアを越えてアラスカに達する。冬期間、オホーツク沿岸の南部藩の防人は壊血病で倒れていたが、対岸のロシ

ジャガイモの伝播



→ 航海食の伝播ルート → 越冬食の伝播ルート → 早生ジャガイモの伝播ルート

ア人がジャガイモと魚で元気だったという。最上徳内が千島でロシア人からジャガイモを貰い蝦夷地（北海道）に持ち帰ったのは18世紀末。それ以前に北前船が漁場で働く人々の越冬食としてジャガイモを伝えているが、オホーツクには達していなかった。

アイルランドの悲劇とチリのジャガイモ ジャガイモの普及で人口の急増したアイルランドを南米から侵入した疫病が襲ったのは18世紀前半、当時のジャガイモは9月にならないと太らないアンディジェナ種だったため、9月の秋雨で激発する疫病は壊滅的な被害をもたらし、ジャガイモを主食としていたアイルランドの人口は餓死と新大陸への移民で半減した。この移民者が持ち込んだジャガイモが北米で広がって、今でもアイリッシュポテトと呼ばれている。

アイルランドだけでなくヨーロッパを脅かした疫病の対策として取られたのがペルーとは別の原産地チリのジャガイモ、ラフパープルチリという品種の導入（交雑種子の利用）であった。ヨーロッパの夏のように日照時間の長いチリのジャガイモは早くイモを太らせるので、結果として疫病の被害を回避できたのである。今私たちが食べているジャガイモ品種はすべてこの時に育成された品種、アーリーローズの子孫である。
ソラナムフレハの見直し 豊かになった先進国の人々はアンデスの美味しい、小さなジャガイモに気づく。私たちが育成した「インカのめざめ」、スウェーデンの「アーモンドポテト」、北米の「ナッティポテト」、すべてフレハの改良種。アンデスの心豊かな人たちに追いつくのに500年もかかったことになる。

（日本いも類研究会顧問 梅村芳樹）